

## まえがき

「相対性理論」で有名なアルベルト・アインシュタイン（ドイツ生まれのユダヤ人）は「大事なことは疑問を持ち続けることであり、好奇心を失ってはならない（The important thing is not stop questioning）」と言っていました。

21世紀になって世の中は加速度的に複雑になってきました。

インターネットが普及し、スマホを持っていない日本人は1%以下といわれています。

ぼんやりしているとすぐに時代遅れになります。

また、最もつらいことは「時代遅れになって誰からも必要とされなくなること」だといわれています。幼児がパソコンのキーボードで遊んでいる時代ですから、「パソコンはわかりません」「スマホは苦手です」では生活しづらい世の中になったのです。

古代ギリシアの哲学者であるヘラクレイトスは「万物は流転する」という思想を提示しています。

また、仏教用語の「諸行無常」は「世の中のものはずべて絶え間なく変化する」と喝破かっぱしています。

さらに、量子力学という物理学の理論では、「電子の波動性（波動理論）」によって「あらゆるものは一瞬たりとも同じ状態にとどまるものはない」ということが示されています。

現代の「キーワード」は「変化」であり、「変化」についていけないとすぐに時代遅れとなり「誰からも必要とされなく」なります。

人は社会的動物なので、「誰からも必要とされなく」なることは「社会的死」を意味します。

江戸時代の諺で「知らぬが仏」というのがありますが、その意味は「知れば悩んだり、怒ったりするが、知らなければ穏やかな気持ちでいられる」ということです。

しかし、現代のような情報化社会では「知らぬ」は致命的になります。

「知らない」よりは「知っている」ほうがいいのです。

例えば最近、交通法規を知らない運転者が急増していますが、交通事故の人的・物質的被害を考える、「交通法規を知らない」ということは犯罪的といえます。

17世紀の哲学者フランシス・ベーコンは「知は力なり (knowledge is power)」と言っていますが、学

校の勉強をはじめとして社会の中で生きていくための知識は計り知れないほど役に立ちます。

学校の勉強は役に立たないと言う人もいますが、それは間違いだと思います。

学校の勉強が社会に出て役立つかどうかだけでなく、「努力する習慣」を身につけることも学校で勉強する主な目的です。

私は大学までの英語の勉強はともつらかったのですが、外国で多くの友人を作れたことや、外国のエンタメを字幕なしで楽しめるので、英語を勉強したことは無駄ではなかったと思っています。

本書は、主に現代の情報に的を絞って執筆しました。

本書が読む人の役に立てば、著者としてこれ以上の喜びはありません。

※量子力学は、原子・分子・電子などの物理現象のこ



ハス

とで、「一般相対性理論」とともに現代物理学の根幹をなす理論分野です。

量子力学の特徴は「不確定性原理」であり、それまでの「因果律（現在がわかれば未来がわかる）」は成り立たないという理論です。

すべての物事は予測不可能、「一寸先は闇」ということを物理学で証明したものです。